

Ⅳ 児童・生徒質問紙調査結果の概要と分析

1 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

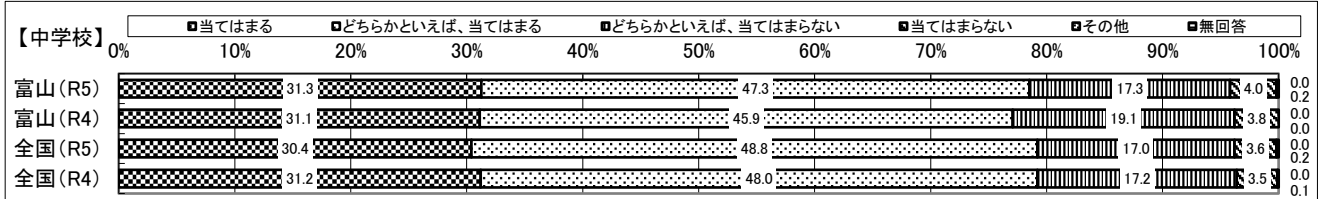
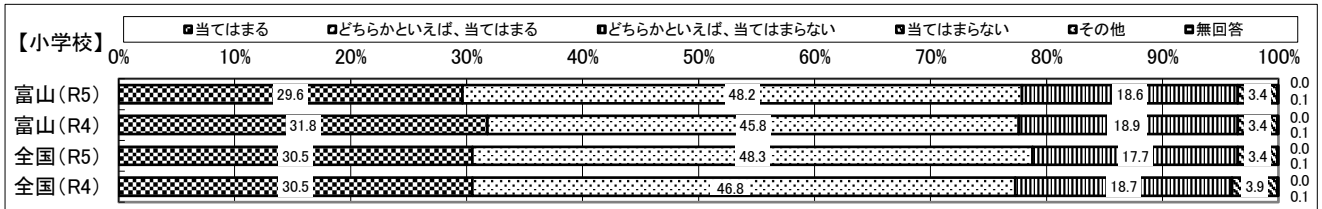
(1) 5年生まで（1、2年生のとき）に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか（質問小33中37）

・「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学校は、令和4年度と比べて同程度で、全国と比べて1.0ポイント低い。中学校は、令和4年度と比べて1.6ポイント高く、全国と比べて同程度である。

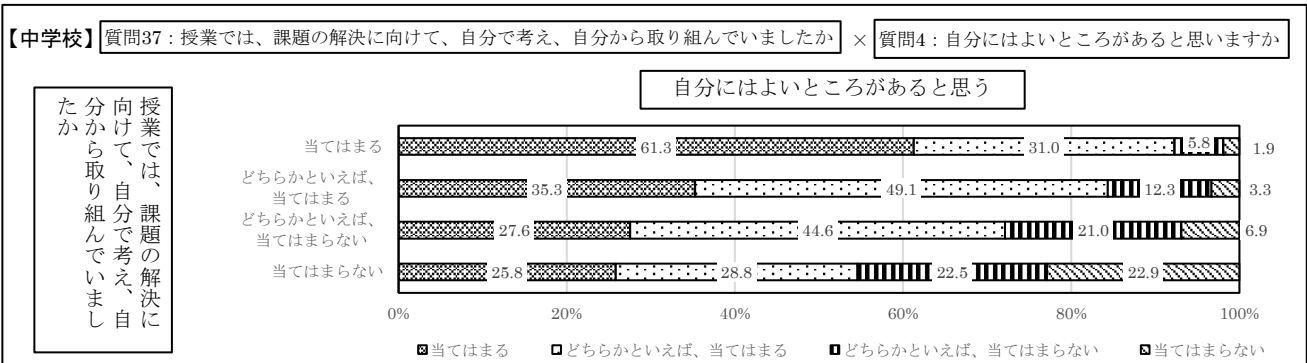
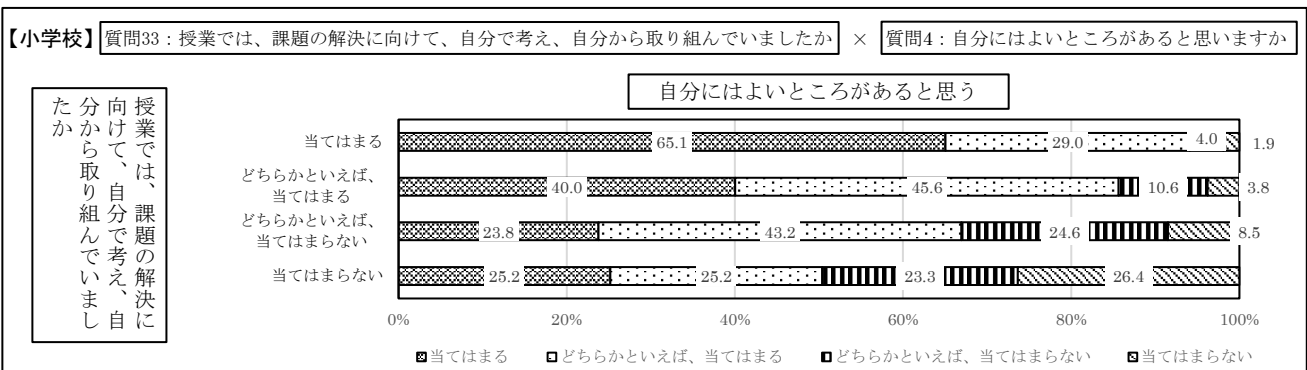
・「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」と肯定的に回答した児童生徒ほど、「自分にはよいところがあると思う」と回答した割合が高い傾向がみられた。また、この他にも自己有用感に関する質問が複数あり、同様の傾向がみられた。

◎主体的に学習に取り組む児童生徒の育成に向けて、問題（課題）意識や学習意欲を高めたり、課題解決の過程において自己調整しながら学習を進めたりすることができるよう、教師の手立てを工夫することが大切である。

◎自分で考え自分から取り組むという主体的な学びと自己有用感には、関係があると考えられる。児童生徒の自己有用感を高め、学びに向かう力を高める授業づくりを通して、学習方法についての指導をより一層充実させていくことが大切である。

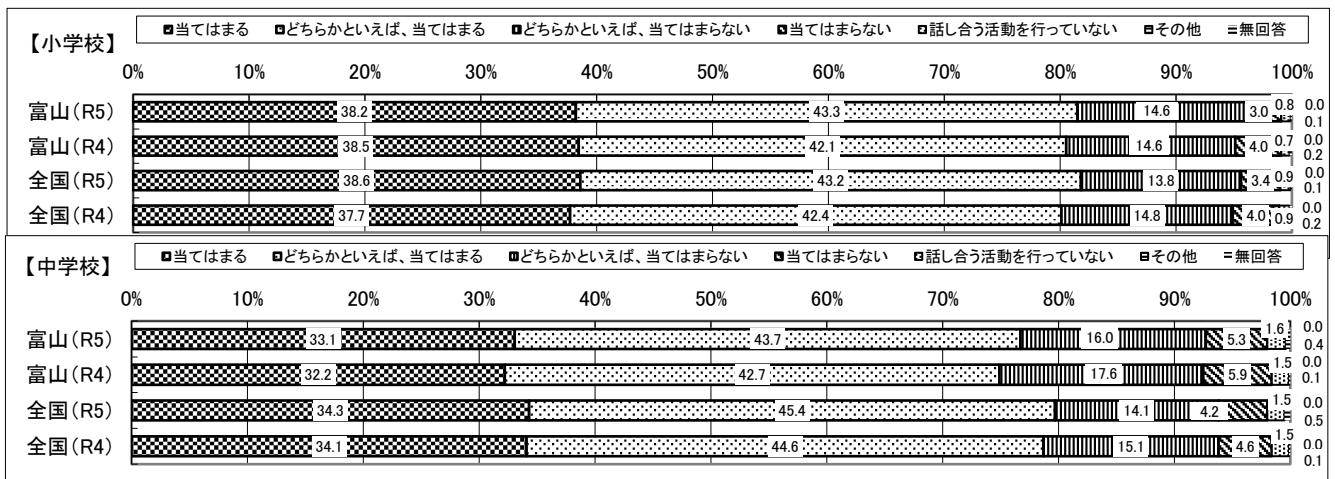


質問小33中37（授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか）と質問小中4（自分には、よいところがあると思いますか）のクロス集計

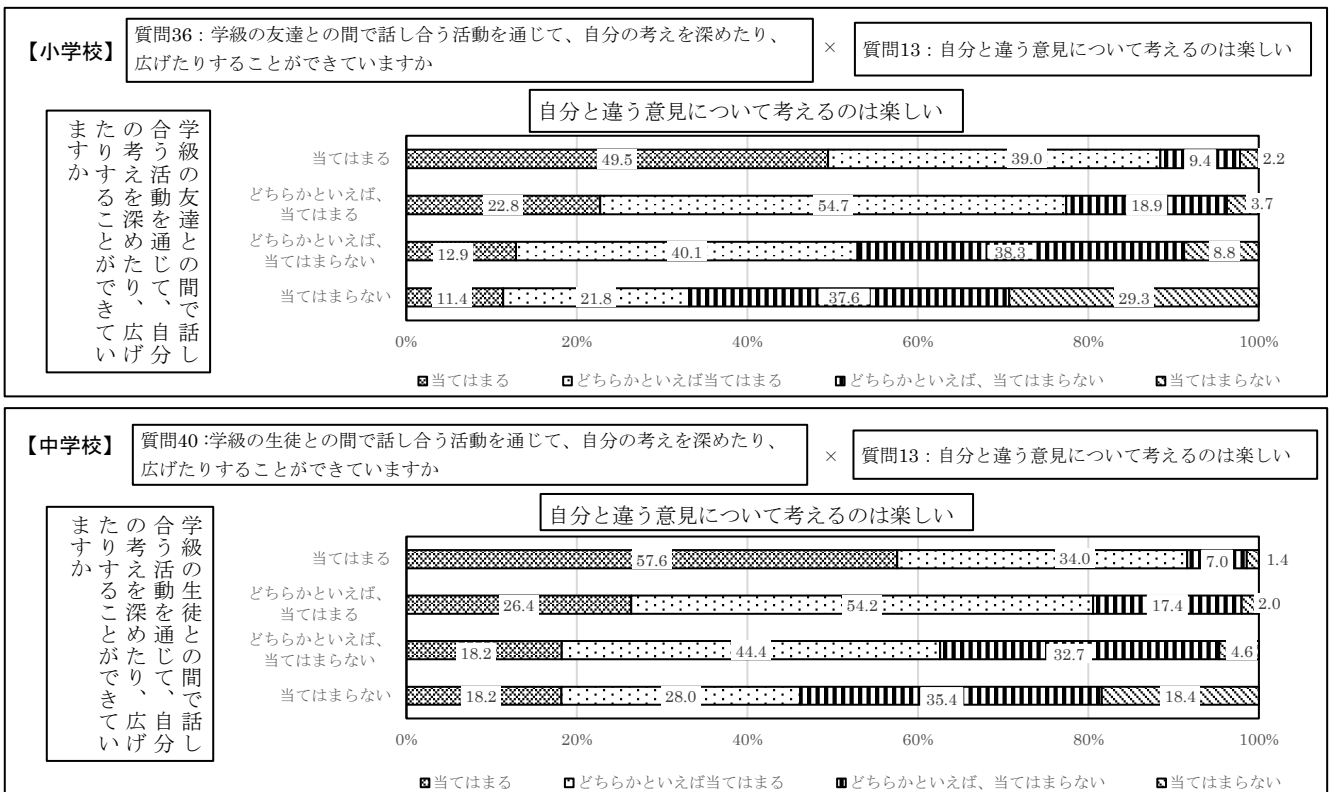


(2) 学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか（質問小 36 中 40）

- ・「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学校は、令和4年度と比べて同程度で、全国と比べても同程度である。中学校は、令和4年度と比べて1.9ポイント高く、全国と比べて2.9ポイント低い。
 - ・「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」と肯定的に回答した児童生徒ほど、「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と回答した割合が高い傾向がみられた。
- ◎多様な考え方を認め、思いや考えを共有し、高め合う機会を充実させ、自己の考えを広げ、深めていく授業づくりが大切である。



質問小 36 中 40（学級の友達 [生徒] との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか）と質問小中 13（自分と違う意見について考えるのは楽しい）のクロス集計

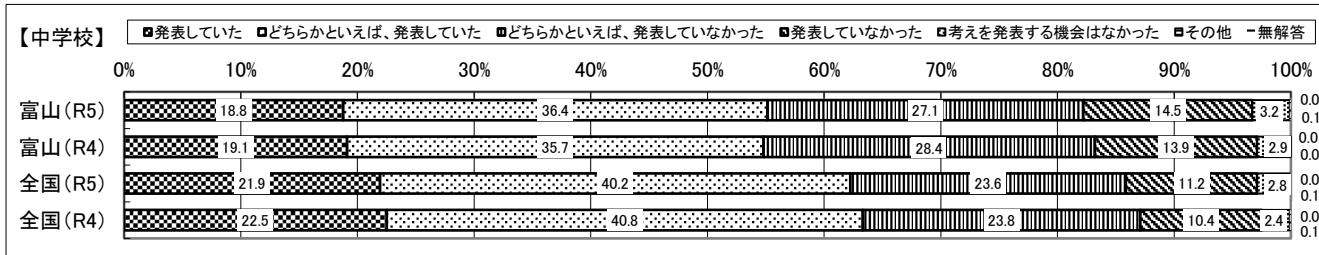
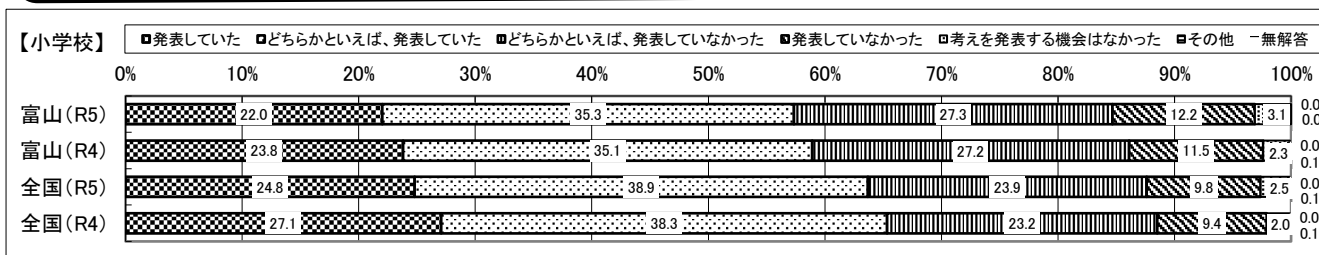


(3) 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか

(質問小 32 中 36)

・「発表していた」「どちらかといえば、発表していた」と回答した児童生徒の割合は、小学校は、令和4年度と比べて1.6ポイント低く、全国と比べて6.4ポイント低い。中学校は、令和4年度と比べて同程度で、全国と比べて6.9ポイント低い。

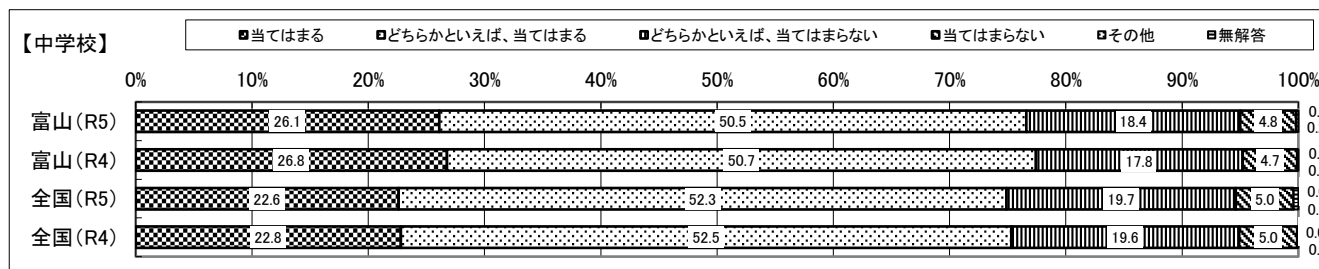
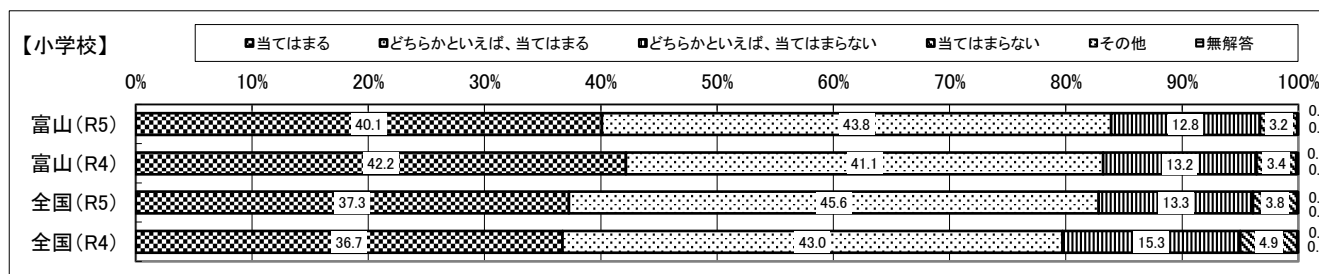
◎自分の考えがうまく伝わるように発表するためには、場の状況や聞き手の立場に応じた表現の工夫を考え、話すことができるようになることが必要である。その際、目的や意図に応じた文章の構成、展開になっているかなどについて検討することが求められる。また、自分の考えを整理して発表したり、自分たちの発表の様子を確かめ、見直したりする学習活動を積極的に取り入れていくことも大切である。



(4) 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか(質問小 35 中 39)

・「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学校は、令和4年度と比べて同程度で、全国と比べて1.0ポイント高い。中学校は、令和4年度と比べて同程度で、全国と比べて1.7ポイント高い。

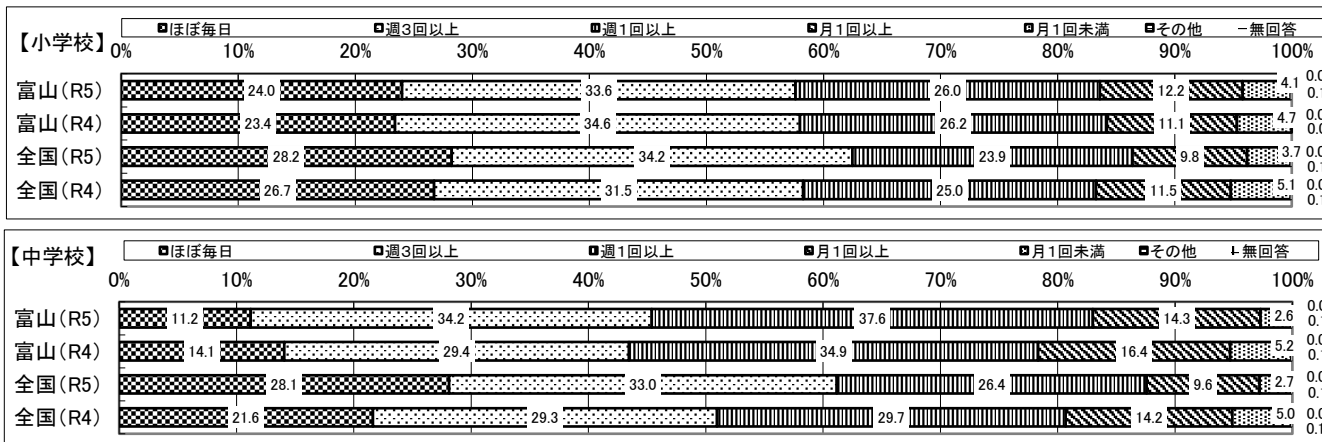
◎児童生徒の特性や学習進度、学習到達度に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行ったり、児童生徒自身が自分に合った学び方を見いだせるよう支援したりするなどして、個別最適な学びをより一層充実させていくことが大切である。



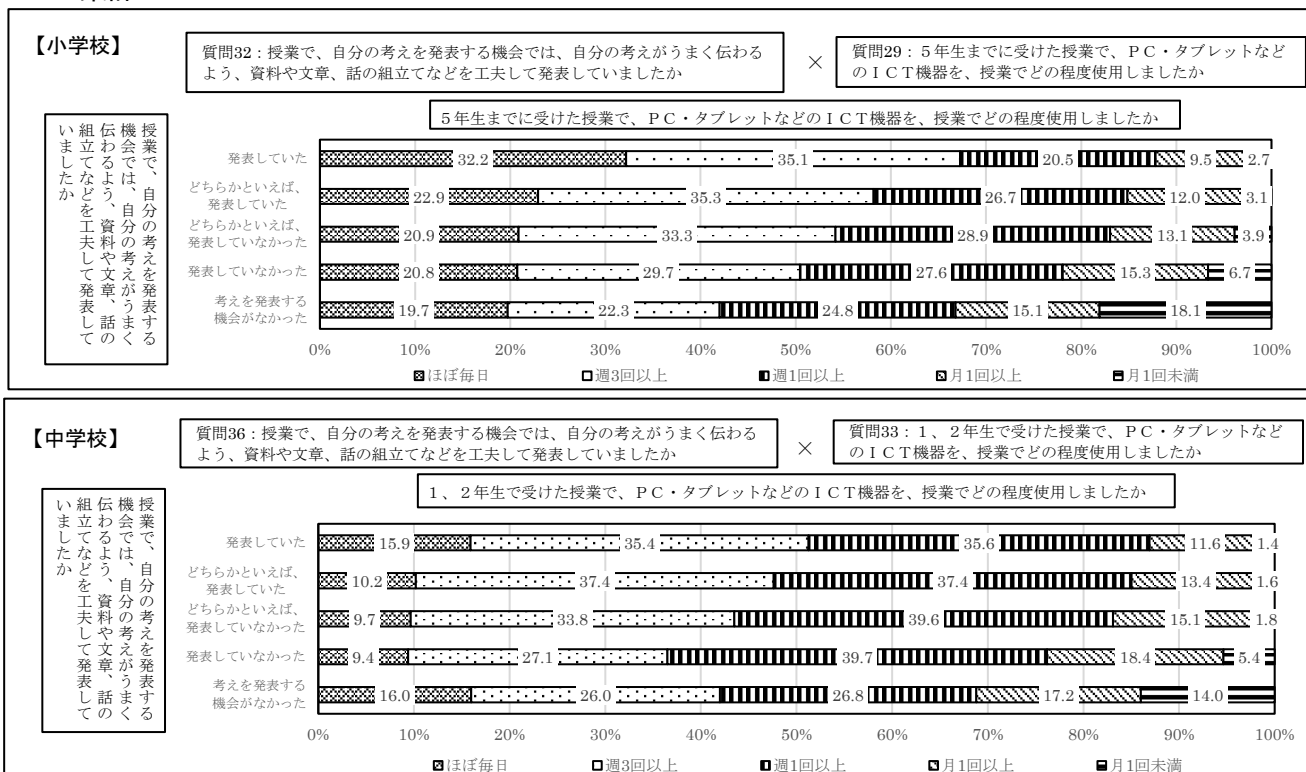
2 ICTを活用した学習状況

(1) 5年生まで（1、2年生のとき）に受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか（質問小中29中33）

- ICT機器の使用頻度については、「ほぼ毎日」「週3回以上」と回答した児童生徒の割合は、小学校は、令和4年度と比べて同程度で、全国と比べて4.8ポイント低い。中学校は、令和4年度と比べて1.9ポイント増加したが、全国と比べると15.7ポイント低い。
 - 「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章の、話の組立て等を工夫して発表していた」児童生徒の方が、ICT機器を活用している傾向がみられる。
- ◎児童生徒の資質・能力、情報活用能力の育成に向けて、ICT機器の特性や強みを生かし、学習ツールとして日常的に活用していくことが大切である。その際、各教科等で育成を目指す資質・能力等を把握した上で、ICTを主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすことが重要である。



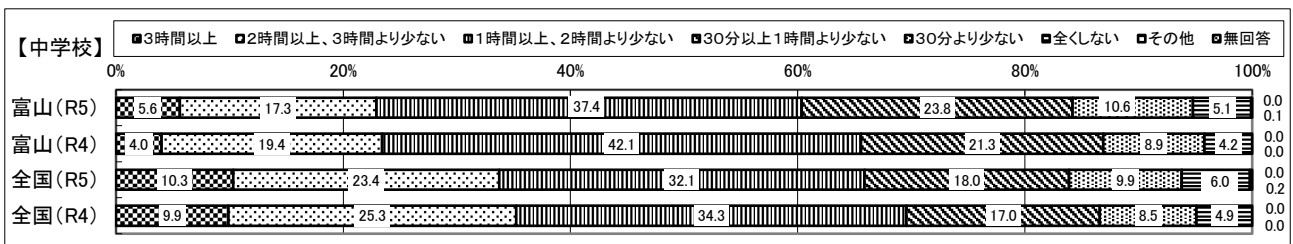
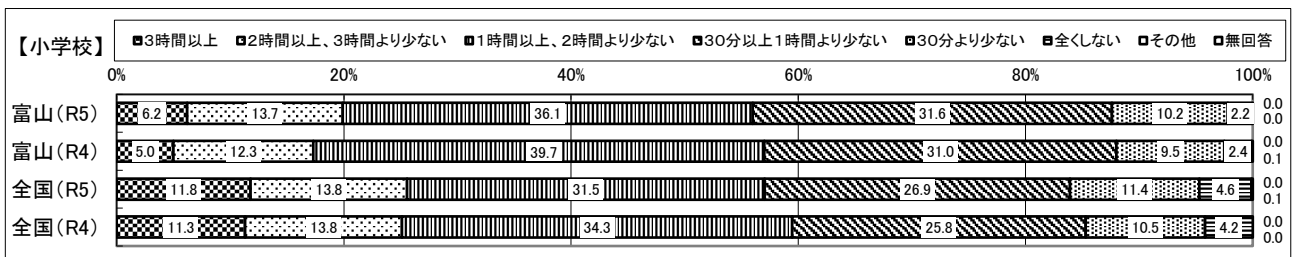
質問小32中36（授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか）と質問小29中33（5年生まで〔1、2年生のとき〕に受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか）のクロス集計



3 学習習慣、基本的な生活習慣等

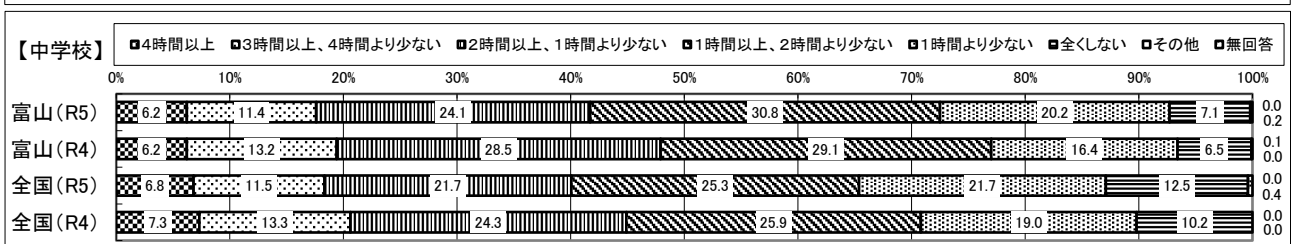
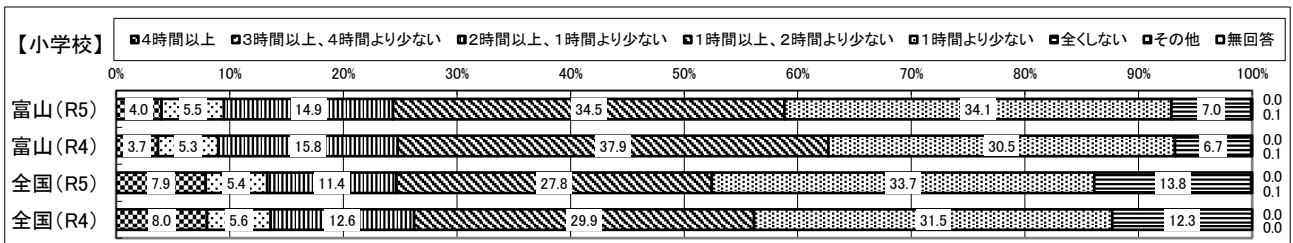
(1) 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）（質問小中 17）

・「1時間以上」と回答した児童生徒の割合は、小学校は、令和4年度と比べて1.0ポイント低く、全国と比べても1.1ポイント低い。中学校は、令和4年度と比べて5.2ポイント低く、全国と比べても5.5ポイント低い。また、中学校で「2時間以上」と回答した生徒の割合は、全国と比べて10.8ポイント低い。
 ◎日頃から家庭学習につながるような授業づくりを行うとともに、児童生徒に対して、宿題や予習・復習等の課題を適切に提示したり、発達の段階に応じた学習計画の立て方や学び方の指導をより一層充実させたりしていく必要がある。



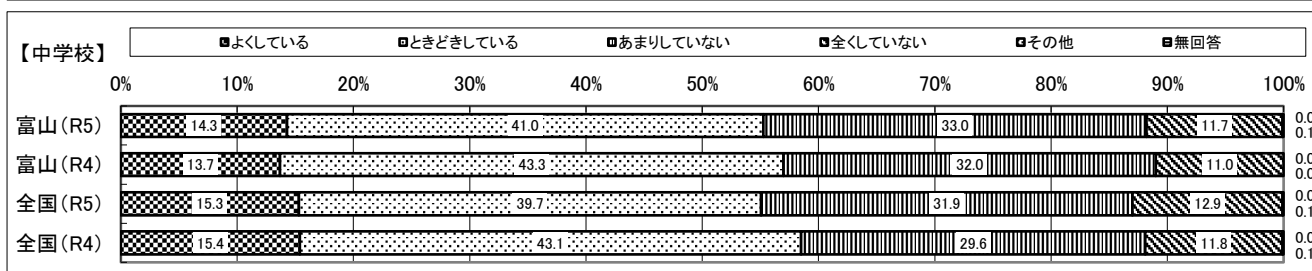
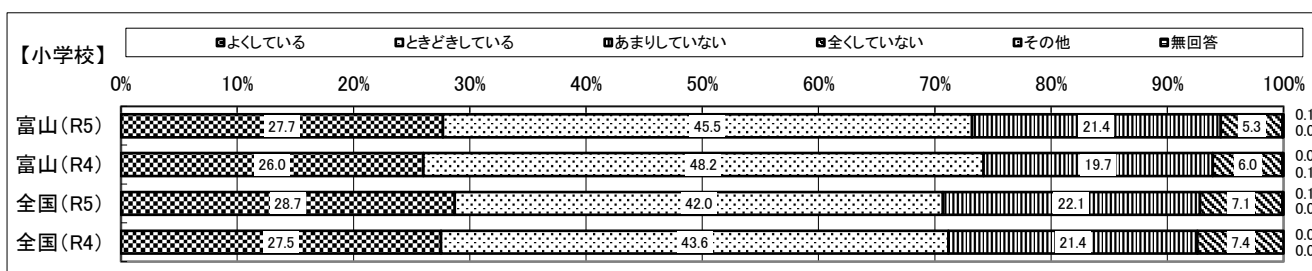
(2) 土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）（質問小中 18）

・「1時間以上」と回答した児童生徒の割合は、小学校は、令和4年度と比べて3.8ポイント低く、全国と比べて6.4ポイント高い。中学校は、令和4年度と比べて4.5ポイント低く、全国と比べて7.2ポイント高い。また、中学校で「2時間以上」と回答した生徒の割合は、全国と比べて1.7ポイント高い。
 ◎平日同様に、家庭学習につながる授業づくりや学習計画の立て方や学び方の指導をより一層充実していく必要がある。また、保護者と一緒に学習に取り組む時間帯や家庭での生活について考えていけるよう、保護者用リーフレット「家庭学習のすすめ」「学校、家庭、地域で育てよう」とやまっ子！」等を活用するなど、家庭との連携を充実させることも大切である。

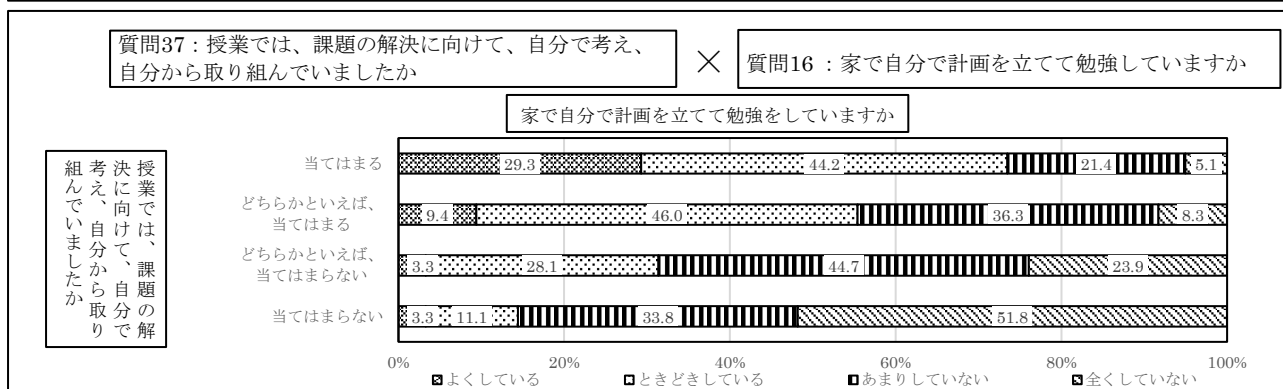
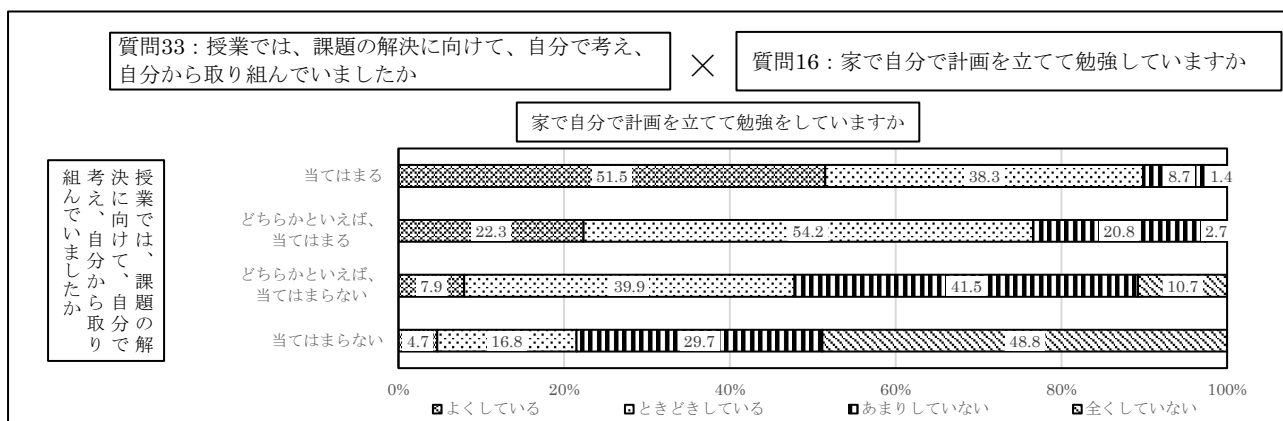


(3) 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含む）（質問小中16）

- ・「よくしている」「ときどきしている」と回答した児童生徒の割合は、小学校は、令和4年度と比べて1.0ポイント低く、全国と比べて2.5ポイント高い。中学校は、令和4年度と比べて1.7ポイント低く、全国と比べて0.3ポイント高い。
 - ・授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる児童生徒ほど、家で自分で計画を立てて勉強している割合が高い。
- ◎児童生徒の学びに向かう力を高める授業づくりを通して、家庭学習につなげたり、学習方法等についての指導をより一層充実させたりしていくことが大切である。その際、振り返りの時間を充実させ、自分の考えや学びを見直し、再認識することで学習への意欲を高めることも有効である。今後も保護者用リーフレット「家庭学習のすすめ」「学校、家庭、地域で育てよう とやまっ子！」等を活用するなど、継続して家庭と連携しながら改善を図ることが重要である。



質問小 33 中 37（授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか）と質問小中 16（家で計画を立てて勉強していますが）のクロス集計

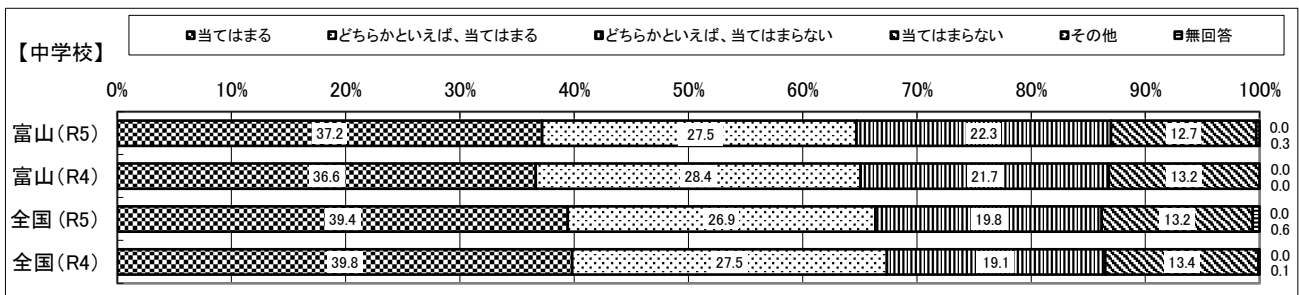
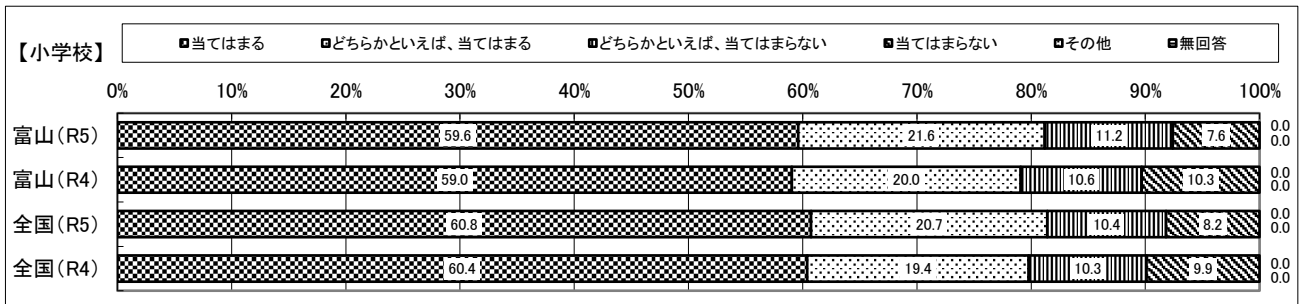


4 挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感

(1) 将来の夢や目標を持っていますか（質問小中7）

・「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学校は、令和4年度と比べて2.2ポイント高く、全国と比べて同程度である。中学校は、令和4年度と比べて同程度で、全国に比べて1.6ポイント低い。

◎児童生徒が自己存在感を実感し、有意義で充実した学校生活を送る中で、自己実現を図ることができるよう、指導の充実を図ることが大切である。また、学校の教育活動全体を通じて、将来の生活や社会と関連付けながら、見通しをもったり、振り返ったりする機会を設けるなど、キャリア教育を効果的に展開していくことも重要である。



(2) 普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか。（質問小中15）

・「よくある」「ときどきある」と回答した児童生徒の割合は、全国と比べて小学校は同程度、中学校は1.0ポイント高い。

◎社会の価値観が多様化する中、学校教育においてもウェルビーイング（心も身体も社会的にも「満たされた状態」、実感としての幸せ等を表す）の向上を目指し、子供たちが自己実現に向けて主体的に自己決定する教育の実践が重要である。その視点からも、児童生徒が多様な他者と協働する楽しさや成就感を味わい、自分らしさを発揮できるようにすることが必要である。

